

木村定三コレクションが愛知県美術館に残したもの

愛知県美術館長 市川 政憲

愛知県美術館に木村定三氏とそのご遺族から、3,000点をこえる収集品が寄贈されたことは、平成15年に新聞等でも報じられましたので、すでにご承知のことと思います。美術館では、このコレクションを「木村定三コレクション」と名付け、外部の研究機関や専門家のご協力を得て整理と調査を進め、また必要な保存措置と並行しながら、その公開に努めています。このたび、展覧会等だけでは紹介しきれない調査研究の成果などについて、木村定三コレクション研究報告書としてまとめ、刊行する運びとなりました。

今後、木村定三コレクションにおける作品の個別研究等にも焦点を当ててまいります。この創刊号は、シンポジウム「作品をまもり、伝える美術館 ―ある仏画(木村定三コレクション)の修復をめぐる―」の記録を核に構成し、シンポジウムには盛り込みきれなかった詳細資料や問題点についての寄稿を添え、未公開の個人コレクションを固まりとして美術館が受入れるということ、その経験を将来にわたり共有するための1冊といたしました。このような個人コレクションの受入れは、大変な作業量と調査のための時間、保存のためのコスト等、人と経費という物理的な問題にとどまらず、美術館の性格と社会的役割という美術館の根幹にも触れる再確認を迫るものとなりました。保存という観点から、私どもが直面した諸々の問題と対応についてご報告し、外部の専門家のご意見をうかがう場としてのシンポジウムの開催は、意義あるものと思います。

個人の所蔵作品が美術館に寄贈されることは珍しいことではなく、それどころか、公共の美術館のコレクションは、個人や企業団体等からの寄贈によって支えられているといっても過言ではありません。公立美術館では、作品収集の基本方針にそって、公費により計画的に作品を購入することで、特色あるコレクションの根幹がつけられますが、その一方で、所蔵家の方々からの贈り物が、コレクションに広がりや奥行き、視野の広さと懐の深さを与えます。つまり、新たな作品が加わると、コレクションに対して、それまでとは違った見方を促されることがあり、それと響きあうこんな作品もあった方がよいというように、寄贈によって投げられた一石が生む波紋によって、コレクションは更新され成長していくものと考えます。

作品の寄贈は、美術館からお願いする場合がありますが、多くは、社会を思う所蔵家の篤志から予期せぬかたちで起ります。ただし、有効な活用が見込めず取蔵庫に眠らせておくことは避けたく、また保存するのもコストと手間のかかることですので、希望に添えない場合も少なくありません。寄贈の大半は、自作や身内の作品を展示したいという申し出であり、美術館では、寄贈をお受けするか否かの判断を今あるコレクションに照らして行なっています。

木村氏のコレクションは、通常の寄贈の一石とは異なり、数にして3,284件、その内訳は考古遺品から現代の作品まで、時代もジャンルも多岐にわたるものでした。その受入れは、20世紀の美術を中心にあつかう美術館としては、コレクションの根幹にかかわる問題です。当館学芸員の専門とする領域は20世紀の美術に偏っており、漢代の銅鏡や北魏の石仏、日本の絵画や書跡でも古い時代のものともなると、どれほどの価値があるものか、客観的な判断を下せる専門家はおりません。平成17年度に開催しました「木村定三コレクションの江戸絵画」展で御覧いただきましたように、そこには与謝蕪村や浦上玉堂の重要文化財指定品も含まれ、また平成18年度には「木村定三コレクションの茶陶」展を愛知県陶磁資料館で開催しましたように、その茶道具のコレクションは、当館よりも陶磁資料館で所蔵されるにふさわしいものとも言えましょう。加えて、このコレクションの規模は、愛知県美術館の所蔵点数に匹敵するものでした。ひとつ方向を過れば、愛知県美術館は20世紀美術という看板を書き換えなければならないかもしれない、それほどにこの受入れは大きな波紋をもたらしたのです。

もちろん、木村氏の収集品は、愛知県美術館のそれまでのコレクションの範疇をこえたものばかりではなく、平成16年度にはその収集品だけで「熊谷守一展」も開催できたほどのまとまりをもったものです。ほかにも、小川芋銭、須田剋太、長谷川利行、香月泰男など近代の作家たちのコレクションもあり、20世紀の美術を中心とする美術館としては、それまでのテリトリーにとどまり、近代美術だけをいただくという選択肢もあったかもしれません。しかし、木村氏は、みずからの収集した品々をひとつのコレクションとして遺すことを心に決め、一体の公共の財産として後

世に託すことを愛知県美術館に委ねようと考えられたのでしょう。それは信念といえるほどに揺るぎないものでした。そのもとには、最も崇高な精神的感銘を「厳肅感」と「法悦感」に認めるという、独自に培った美学に裏打ちされた、みずからの眼への確信がうかがえました。

学術的な専門性をたよりとするならば、時代も地域も広範にわたるそのコレクションを、20世紀美術を中心とする美術館に安心して委ねることはできなかったと思います。独自の美意識をもって、自分の眼に適う品々を収集してこられた木村氏は、みずからの美学に拠って立つ批判的精神から、学術的な専門性に基づく客観的な価値判断を求められる公立美術館のコレクションに対して、個人コレクションをつきつけました。それは、美術館が健啖なるアマチュア精神の意味を問い、美的体験というものが本質的に個人的なものであることへの覚醒を促したものと思えてなりません。是非を問うのではなく、公共のコレクションと個人コレクションの、拠って立つところと性格の違いを認めた上で、双方が互いに補い合うことを期待し、みずからの収集品をひとつのコレクションとして私たちに委ねたものと受けとめます。

学芸員は、その専門的な知見をもって美術館の使命を果たすことに努める者ですが、彼らもまた一人の観客としては、専門領域のうちのみ精神的感銘を見出すわけではなく、広くさまざまな美術品に美的体験を覚える者でもあります。しかし、20世紀の美術を看板に掲げる美術館が、それが歴史的な優品だからといって江戸の絵画に公費をあてることはできません。木村氏は、公立美術館の公共性の意味するところを汲み取った上で、その専門に縛られたり、絶対化したりすることなく、広い視野と深い懐をもって私たちの時代の美術に臨むことを、コレクションの寄贈をもってバックアップされたのではないのでしょうか。木村氏の寄贈は、美術を広く渉猟された個人コレクターならではの考えから、研究のための研究として専門性が限りなく細分化されていく現代の風潮に対し、アマチュア精神の涵養を美術館と社会に伝え遺そうとされたように思います。

すでに企画展として公開しました江戸絵画のコレクションひとつとっても、いまではとても作れるものではなく、愛知県美術館が収集してきた近代美術のコレクションの背後に、こうした近世絵画のコレクションがあることは、美術館のコレクションに確かな奥行きを与えることになりました。けれども、専門外の領域にわたる、膨大な量のコレクションの受入れに伴う作業は、測り知れません。寄贈手続きが本格化してからすでに5年になりますが、作品が公共のコレクションになるために必要な基本的な登録作業はなお続いています。木村氏のコレクションが個人コレクションである上に、展覧会などで公開されることも少なかった知られざるコレクションであったために、登録のための基礎データの作成、つまり作品一点一点の戸籍簿作りは大変な作業量です。作品の形状の記録や保存状態の診断に始まり、いつごろ誰によって作られたものか、その美術史的な価値はどのようなものか、専門家による基礎調査と客観的な評価をうかがう作業も並行して進められる必要があります。

保存担当の学芸員が中心となって企画したこのたびのシンポジウムは、寄贈が決まってから今日まで、木村定三コレクションに美術館がどのように取り組み、何をやってきたのか、その報告を通して、外からはうかがい知ることのできない美術館の、日常的にして基礎的な調査活動を知っていただく目的で開催されたものです。美術館からは、作品の登録作業と修復計画の作成に焦点をあてて報告をし、また、外部から3人のパネラーに登壇いただき、修復が予定される古画について、美術史的な見地、技法的な見地、修復の見地からのお話をいただきました。それは、一点の美術品がもたらす情報の豊かさ、それを損なうことなく保存していく取り組みが美術館においてどのように行われているかを一般に知っていただく好機であったと言えます。現在、平成19年度末に予定される木村定三コレクションの全貌を紹介する展覧会の開催に向け、必要な基礎調査をほぼ終え、保存のための修復計画の実施に取りかかっています。

こうしたシンポジウムは、木村氏のコレクションを受入れることがなければ企画されず、また仮に、私たちの専門領域に閉じ籠り、寄贈の受入れを20世紀の美術に限っていけば、もっと容易に済むことであり、このような開かれた機会をもつことはなかったでしょう。すべては、公共のコレクションとは性質の異なる、研究者の専門性とは別の美的判断で形成された個人コレクションを受入れたことから始まったのです。そのための手間は測り知れませんが、その手続きとケアの細やかさのなかから何か新たな始まり、可能性が予感されます。続く報告にみるように、これまで外部の専門家に、それぞれのジャンルでの意見をうかがってきましたが、私たち美術館員はみずからの専門外の領域

にかかわることで、あらためて公立美術館としての責任ある専門性の自覚を促されたように思います。同時に外部の知見を求めることで、美術館を外に向かって開くことにもなりました。そして、外からは見えにくい専門的な活動を皆様に知っていただく機会を持てたことによって、美術館がまた一歩開かれたものとなったのであれば、幸いであります。

受入れの過程でご協力、ご支援くださった各方面の方々に感謝しつつ、あらためて故木村定三氏の愛知県美術館に寄せられた深い配慮に合掌したいと思います。また、最後になりましたが、コレクションのご寄贈はもとより、調査・研究のために多大なご支援を賜りました木村美保子様をはじめ、ご遺族の方々に心からの感謝を申し上げます。